
ラブンツェラ・ラッシエラ

村上まゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラプンツェラ・ラッシエラ

【Nコード】

N8242E

【作者名】

村上まゆみ

【あらすじ】

グリム童話『ラプンツェル』のブラック・パロディで、大人のための童話です。本当は一国の王女なのに、双子は不吉であるとする王室の風習から捨てられることになったラプンツェラ……彼女は養父から性的虐待を受け、さらには娼館へ売られますが、そこで出会った王子さまの愛人になります。しかし、エドワール王子は実は、彼女の実の兄で……！？

第1話（前書き）

ブラック童話なので、元のグリム童話『ラプンツェル』のようなさわやかさはないかもしれませんが。その点、ご留意いただけますようお願いいたします。

第1話

ラプンツェラ・ラツシエラ

昔、エスカルド王国のブライエンバツ八王の治世の時代、王室に可愛い双子の女の子が誕生いたしました。けれども王が王妃の寝室で元気なふたりの子の誕生を喜んだのも束の間、すぐに双子の娘たちは引き離され、ひとりには王家に誕生した正式な子として、いまひとは西のはずれにある魔女の森へと捨てられることになりました。

古来より、王家に双子が生まれるのは不吉なことの起きる前兆、そのしるしであるとの言い伝えがございまして、後から生まれたほうの子を 取り上げた乳母か産婆か侍医が、産後間もなく顔に濡れた布を被せて殺すということになっておりました。この方法は王と愛妾との間に生まれた望まれぬ子に対しても普通に行われていたのですが、流石にこの時ばかりは王妃の乳母も王宮づきの侍医も、また城下町のほうから特別に呼ばれていた産婆も、この可愛らしい王さまの娘を生まれなかつた者とするのを嫌がりました。何故といって、曲がりなりにも王家のお子ですし、何よりこの可愛らしい女の子の様子といたら まるで天使のようなのです。

「こんな可愛い子を窒息死させるだなんて、悪魔でもなきやできませんまいよ。なんにしてもわたしは悪魔なんぞに魂を売るつもりはありませんね」

城下町で評判の熟練の産婆は、口止め料にと積まれた金貨に目もくれず、すぐにさっさと自分の家へ帰ってしまいました。王妃さまの乳母はといえば、上の女の子の面倒を見るのにかかりきりでしたし、途方に暮れた老侍医は可愛い下の女の子を抱えてこっそり王城を出しました。

どうしてもこの天使のような可愛い子を殺すには忍びませんでしたし、かといってこっそり自分の子として育てるようなわけにもい

きません。老侍医は馬車の中で「可哀想に、可哀想に」と何度も呟きながらも、結局その子を西にある魔女の森へ捨てることにしたのでした。魔女の森などと申しましても、かつてそのような女性がその森に住んでいたと言い伝えられているだけで、今現在そこに魔女が住み着いているというわけではありません。またその森は迷いの森とも呼ばれていて、あまり奥まで踏みこむと生きては帰ってこられないということでも有名でした。

ですからこの年老いた王宮づきの侍医は、森のほんの入口に差しかけたところで御者に止まるよう命じ、天使のように愛らしいその子を、「どうか恨まないでくれ」と言って紫色のおくるみごとその場所に捨てたのでした。

鬱蒼と黒い杉の樹が連なるその下にその赤ん坊が捨てられた夜、天空には美しい満月が輝いていました。耳を澄ますとどこかからオカミが遠吠えをしているのが聞こえてきます。かと思うと、森の奥　深い闇の彼方から、一匹の大きな山犬が現れて可哀想な捨て子のことを口にくわえてゆきました。

その生後間もない赤ん坊は泣きもしませんでしたし、むしろ楽しそうにキャツキャツと笑っております。山犬は自分の寢床にその子を連れ帰りますと、ぺろぺろと舌でなめて自分のお乳を吸わせるように致しました。実をいうと彼女はつい先日、きのこ狩りにきていた人間たちに自分の小さな子供たちを殺されたばかりだったので、山犬はその人間の赤子を、まるで我が子のように可愛がり、その子が三歳になるまでよく世話をして育てたのですが、またしても悪魔のような人間が　彼女とその愛らしい女の子との間を引き裂いたのでした。

大工のアンブローシエ・ラプンツェラはよく晴れ渡ったその日、彼の可愛がっている愛豚のトン吉を連れて、西の魔女の森へトリュフ狩りにやっけてきていました。この丸々とよく肥えた豚のトン吉にはある特殊能力があって、すぐにトリュフがどこにあるかを発見で

きる、非常に優れた鼻を持っていたのでした。

「へへへ。今日もひとつ頼むぜ、トンちゃんよ」

アンブローシエは豚の首から綱を外すと、鉄砲を肩にかけて彼のあとを追い、次から次へとトリユフを発見しては、したり顔をして籠の中にそれを入れていきました。彼自身もトリユフは大の好物でしたし、何より城下町の店では高く買いつつてくれますので、彼はそのお金で明日、王立競馬場である馬に賭けるつもりでおりました。「もし明日、ドリス伯爵のバートレット号が一位になったらトリプル・クラウンだなあ。デューク男爵のオルブライト号もなかなか速いんだが、やはりドリス伯爵の敵ではあるまい」

この競馬狂で酒飲みで自分の妻には日常的に暴力を振るっている駄目親父は、籠いっぱいになるまでトリユフを集めると、愛豚のトン吉を連れてそろそろ帰ろうとしました。そしてトン吉がしきりに茂みに隠れた穴蔵にブヒブヒ鼻を突っこんでいるのを見て、これで最後にしようと思ったのですが、なんと！驚いたことにそこには金の巻き毛のなんと愛らしい様子の女の子が眠っているではありませんか！

「……こりゃあ、おそらく捨て子だな」

アンブローシエは見て見ぬふりをしてその場を立ち去ろうとしたのですが、その子が薔薇色の頬をしてあんまり可愛らしいのでちよっと触ってみたくなったその時でした。茂みの奥のほうからガサガサツと何かが近づいてくる気配がしますと、トン吉がブヒヒヒツと叫び声を上げたのです。

「この野郎！よくもトン吉を！」

トン吉は首に食らいついた灰色の山犬をなんとか振りほどこうとしましたが、山犬は一度離れると今度はトン吉の後ろ足に噛みつきました。足に怪我をさせて動けなくさせようとしているのです。たまらなくなつたアンブローシエは鉄砲で山犬を撃ち殺そうとしました。

ズダアアン！

あたりに銃声が鳴り響くと、そばの樹々の梢でおしゃべりしていた鳥たちはみな、一斉に飛び去りました。森に捨てられて本当なら死ぬはずだった子供もまた目を覚まして、穴蔵からのそのそ出てきました。山犬は心臓を撃ち抜かれ、だらりと赤い舌を垂らして死んでいます。アンブローシエという男は決して良い人間とはいえませんが、それでも血を流している山犬の死体を子供の目から隠すくらいの分別は持ち合わせていましたから、彼女を抱きかかえると後ろ足を引きずるトン吉とともに、家路に着くことにしたのでした。

アンブローシエと家内のミッシェルの間には子供がおりませんでしたので、ふたりはこの山犬に育てられた可哀想な女の子を引きとることにしました。何より子供ができて喜んだのはミッシェルで、彼女は昔から女の赤ちゃんが生まれたらつけようと思っていた名前ラプンツェラという名前を彼女につけました。

ミッシェルはいくら血の繋がりはないとはいえ、この子のお陰でもしかしたら、亭主のアンブローシエも変わってくれるかもしれないと望みを持っていました。アンブローシエは大工としての腕前はなかなかだったのですが、途方もない大酒飲みでギャンブルに目がなく、その上とても短気でしたから、酒場でポーカーに負けては喧嘩をして帰ってくるというのを、懲りずに何百回となく繰り返していました。しかもそれだけではなく、自分のむしゃくしゃする気持ちを妻に暴力を振るっては解消しているという、最低の男の標本みたいな人間でした。

さらに、もっと悪いことには、アンブローシエは自分が西の魔女の森で拾ってきた娘　ラプンツェラの胸が膨らみ、彼女が初潮を迎える頃になりますと、この血の繋がらぬ娘に対して性的な暴力を加えるようになりました。

ラプンツェラは小さな頃から美しく、そのせいかどうかアンブローシエは彼女にだけは手を上げたことさえなかったのですが、妻に

対しては相変わらずでした。ところが、義理の娘と性的関係を持っているという後ろめたさのためか、彼は妻の目を盗んでラプンツェラと寝るようになってからは、ミッシェルに暴力を振るわなくなりました。それどころか、酒を飲む量も自然と減り、毎日真面目に大工仕事に励んでは酒場にさえ寄らず、真つすぐ家へ帰ってくるようになったのです。

ラプンツェラは小さな頃から耳が聞こえませんでしたので、当然ながら話すこともできませんでした。城下町には彼女のような人のための聾啞学校がありましたが、ラツシエラ夫妻の間にはそこに養女を通わせるほどの金銭的余裕はありませんでしたので、娘を手元に置いて養育し、村の小さな学校にさえ通わせなかつたのでした。

ミッシェルは特別、ラプンツェラが口を聞けないからといって残念がったりはしませんでした。ラプンツェラは小さな頃から素直で、親の言うことを聞く良い娘でしたし、彼女の耳に口汚い夫婦の罵り言葉の応酬が聞こえなかつたというのも、ある意味では喜ばしいことだったかもしれません。それでももちろんラプンツェラには、ふたりの夫婦仲が最悪に近いくらい悪いということだけは、いつもひしひしと肌で感じていたのですが。

ラプンツェラは料理も裁縫もとても上手でしたし、自分にできることで義理の母のためになることならばなんでも手伝いました。井戸の水汲みやら野菜畑の手入れ、ドレスの仕立てや家の掃除、風呂を焚くことなど、なんでもです。ミッシェルは夫に暴力を振るわれるやるせなさをラプンツェラをいじめることで解消しようとするような人間ではありませんでしたし、常に愛情あふるる心優しい養母とまではいきませんでした。それでも彼女のラプンツェラに施した躰はきちんといき届いた立派なもので、ラプンツェラのほうでもミッシェルのことをとても慕っていました。

ああ、それなのにそれなのに、あの駄目親父のアンブローシエは、せつかくのこの母娘の絆を引き裂いて、二度とは元に戻らなくさせてしまったのです。

ある時、村の婦人会の寄り合いからミッシェルが戻ってみると、「あー」とか「うう」という呻き声のような、なんともいえない娘の声が、彼女の部屋のほうから聞こえてきました。ミッシェルはラプンツェラが時々、そんなふうに興味不明の言葉を呟くのを知っていましたので、特に気にも留めなかったのですが、ベッドがギシギシと揺れる音が続いて、「ああ、ラプンツェラ。おまえの体は最高だよ」と飲んだくれのろくでなし亭主がしわがれ声で言っているのが聞こえると、もはや冷静ではいられませんでした。

あとになってからミッシェルは、何故この時すぐにドアを開けてふたりをまごつかせてやらなかったかと後悔するのですが、彼女はあまりのことにショックを受け、家を飛びだしていくことしかできなかったのです。そして菜園のレタス畑のところまで走っていき、そこに蹲って大声で泣き喚いたのです。

このことは、ミッシェルにとってはひどい裏切り行為でした。もちろん彼女にはすべてわかっていたのです。ラプンツェラは決して自分の夫を誘惑するような娘ではありませんから、あのろくでなし亭主がいやらしい指を養女に伸ばしたのであるうことは容易に想像がつかしました。

実はミッシェルは孤児で、引きとられた先の養父に性的な関係を強要されたという経験があったので、可哀想なラプンツェラの気持ちとがどんなものか、よくわかっていたのです。ミッシェルの養母もまた、いつの頃からかそのことに気づいてはいたのですが、彼女は見て見ぬふりをし、ミッシェルにつらく当たっては、自分の傷ついていた気持ちの代価を絞りとりうとしたのでした。

ミッシェルはこれまで、自分がそうした境遇にあったがゆえにこそ、ラプンツェラのことをいじめもせず可愛がってきたのです。でももう流石にミッシェルにも自信がありませんでした。

その晩、ミッシェルは早速とばかりラプンツェラのことをつまらないことで叱ってしまいましたし、そのことをアンブローシェが諫めてきた時には彼に対して殺意を覚えたほどでした。

(一体誰のために、わたしがこんな　こんな……)

ミッシェルは小さな頃から感情を抑制することに慣れていましたから、この時もすぐ冷静になり、自分はおそらく今ひどく醜い顔をしているだろうと客観的に考えました。そして夜寝る前に鏡の前で年老いた自分の姿を眺めると、若々しく美しいラプンツェラと比べていることに気づき、ひとつのある大きな決意をしたのでした。

それは、ラプンツェラを城下町にある仕立屋で住みこみのお針子として働かせるということでした。ミッシェルは夫のアンブローシエに一言も相談することなくひとりでそのことを決め、次の日娘に町へいく支度をさせると、仕立屋のウインスレットの店の扉をくぐったのでした。

そこでミッシェルは、娘がとても気立てのいい子であることや、ラプンツェラがこれまでに作ったドレスや刺繍などを見せて、口は聞けないけれどもその分真面目に熱心に働くだろうということを店主に必死で訴えました。

実をいうと店主のレオノール・ウインスレットは、ちょっともったいぶった振りを試してみたというだけで、ラプンツェラが店のドアをくぐった時から彼女を雇うことに決めていたのでした。彼は店の窓に張りだされていた求人広告をすぐに剥がし、

「 よろしい。それでは早速今日から働いていただくこう」

そう尊大な調子でミッシェルに告げました。

「 給金は一日二十ドローラ。休日は毎週日曜日だけ。妻のルリアの家事を手伝ってくれるなら、下宿料はただにしよう」

「 本当ですか!？」

ミッシェルはミスター・ウインスレットのあまりの気前のよさに思わず娘のラプンツェラのことを抱きしめました。この時代、コックの見習いになるにせよパン屋でパン職人の弟子になるにせよ、あるいは大工になるにしても工房で働くにしても　住みこみの下っ端というのは、給金から下宿代やら食事代が差し引かれてしまうと、手元にはほとんどお金が残らないのが普通でした。だからミッシェ

ルは娘が一生懸命働きさえすれば、少しずつ自分のために貯えていけるだろうことを知ってとても喜んだのでした。

「さあさ、ラプンツエラ。これでおまえも立派に一人前になれるよ。おまえももう十六なんだし、これからは自分ひとりで生きていくってことを考えなきゃ」

十三年もともに暮らし、夫の暴力で惨めな気持ちに打ちのめされる時も、ラプンツエラはミッシェルの心の支えでした。それなのに今、一生手元に置いておきたいとずっと思っていた可愛い娘を自分の手で手放そうとしている……そう思うとミッシェルは瞳に涙が滲みましたが、布を型どおりにハサミで裁断する時みたいに、最後にはすべてをきつぱりと諦めたのでした。

ラプンツエラは耳が聴こえませんでした、まだよく事情は飲みこめませんでした。それでもミッシェルの灰色の瞳の中に涙が滲んでいるのを見て、自分がこれからは家を離れて暮らさなければいけないこと、そしておそらくはこの店で働かなくてはいけないだろうことを直感したのでした。

「ママ！」

ラプンツエラは自分が唯一しゃべれる言葉を最後に叫びましたが、お母さんのミッシェルはもう、後ろを振り返ることさえせずに、町の大通りの向こうへと消えてしまったあとでした。

「大丈夫だよ。僕がついてる」

ウィンスレットは泣きながら窓の外を眺めているラプンツエラの肩を抱くと、彼女のうなじの匂いをかぎながらそう言いました。そうなので、彼はもう早速この時から、この口の聞けぬ純粹無垢な美しい娘を手ごめにしようと考えていたのでした。

レオノールは二階の客室のひとつにラプンツエラの荷物を運びこむと、台所仕事をしていた奥さんのルリア・ウィンスレットに新しい住みこみのお針子を紹介しました。そして彼女はすぐに非常に不機嫌になったのでした。何故って、前に住みこみで働いていたお針子は、彼女の亭主と出来ていたことが原因でこの家を追いだされ

たのです。それなのにまた、性懲りもなく……ルリアはそう思いました。でも、ラプンツェラが容姿はこの上もなく美しいけれども、口を聞けないことを知って彼女はいたく同情し、すぐになんでもラプンツェラによくしてやるようになりました。

このふたりはとてもよく気が合いましたし、毎日共同作業で繕い物をする呼吸もぴったり合い、他に何人かいるお針子の中でもラプンツェラの縫い物の腕前はピカ一だとルリアは思うようになりました。そこで店主のウインスレット氏は、普段は自分か妻がやっている仕事　お客さまの寸法をはかって型をとったりする仕事　まですらラプンツェラに教えるようになったのでした。

そうして一月が過ぎ、二月が過ぎ、レオノールはラプンツェラに手をだすのをとうとう断念するにしました。自分の妻と住みこみの使用人が毎日楽しそうに縫い物をしたり、台所仕事をしたりしているのを見ると、とてもその間に自分が割りこむ余地はないと感じたからでした。でもそのかわり、彼の目はいつもラプンツェラのことを追っており、仕事の合間合間に自分と彼女が寝ているところを想像しては、禁欲的な喜びに打ち震えていたのです。

(……こんな恋があっても、いいのかもしれない)

次第に、この四十過ぎの洒落男はそんなふうを考えるようにさえなりました。そして何かの拍子にラプンツェラの肩に触れたり、手をとって物を教えたりしては、精神的な姦淫を犯していたのでした。確かにこれは　肉体関係がない以上、浮気とは言えないかもしれません。でも妻のルリアは敏感にそのことに気づいておりましたので、内心では(目の前で自分の亭主が他の女といちゃいちゃするよりよほど始末が悪い)と、そんなふうに感じていたのです。そして彼女自身、だんだんにラプンツェラに親切にするのが難しくなっていたのです。

ルリアはラプンツェラより二十も年上でしたので、当然ながら肌の色艶も彼女よりは劣っていますし、もともと太めなので腰などはほっそりしたラプンツェラの二倍はあるうかというふうに思われま

した。しかもあの天然の巻き毛　ルリアはラプンツェラの自然にカールした美しい金の髪を見るにつけ、やがて嫉妬に身を焼き焦がすようになりました。何故って、彼女の髪は赤毛に近い褐色で、ルリアは昔からラプンツェラのような金の巻き毛に死ぬほど憧れ続けてきたからなのでした。

そして、嫉妬に狂いながらもラプンツェラの自分のことを信じきった、純粹無垢な笑顔に抵抗できないルリアが最後にとった行動は雇い主の妻としても、また彼女の唯一の友達としても、非常に恥ずべき行いだったと指摘せざるをえません。

ラプンツェラが口を聞けないのをいいことに、ルリアは夫とラプンツェラの双方をうまく騙し、彼女を娼館に売ってしまったのでした。娼館『インマゼールの館』を経営するマルテ・インマゼールは、色町界限では知らぬ者のない、結構なやり手婆でした。ルリアは何も知らないラプンツェラのことをマルテの元へ連れていき、驚くほどの金額を受けとると、すぐにそそくさとインマゼールの館をあとにしました。

「ほっほっほっ。これはまた結構なべっぴんさんだねえ。ちょっと服を脱いで裸になってごらん」

マルテが指を鳴らすと、深紅のビロードの緞子の裏側から自分の出番を待っていた娼婦がふたり、姿を現しました。彼女たちが自分のよそゆきの服を脱がせようとするのを見てラプンツェラは抵抗しましたが、ただの一枚しかないモスリンのよそゆきを駄目にしたくなかったので、最後は黙って言うなりになってしまいました。

「ほっほっほっ。まだ十六歳というわりに、なかなかいい体をしてるじゃないかえ。ねえ、おまえたちもそう思うだろう?」

マルテがりボンやレース飾りのついた黒の扇で顔を煽ぎながらそう言つと、脇にいた娘たちはふたりとも、しぶしぶながら彼女の言葉を認めました。

「そうね、ママ」

「やっぱり、若い子には負けるわね」

などと、溜息を着きつつ。

化粧をみっちりして髪型も衣装もめかしこんだ三人の商売女たちの雌的な視線の前に投げだされて、ラプンツエラは顔を赤らめました。木綿の下履きだけになったラプンツエラは髪や手で胸を隠そうとしましたが、マルテは彼女の腕をぐいと引っぱり、長い髪もすべて後ろへやっつけてしまいました。そしてラプンツエラのことを大鏡の前に立たせると、両手で胸をつかんだり乳首をつまんだり、その上に舌を這わせたりということをしました。

ラプンツエラは最初恥かしそうに顔を背けていただけでしたが、マルテが下履きまで脱がせようとしたので、流石にその時には抵抗いたしました。でもいつの間やら後ろに、ラシーヌとイレエヌという名の娼婦がいて、ラプンツエラの体を抑えつけていました。そしてこの三人は深紅の緞子の裏側にある真鍮のベッドで、代わるがわるラプンツエラの肉体を弄び、男に抱かれるのがどんなことかというのを官能的な技を尽くして教えこんだのでした。

第2話

ラプンツエラが娼館『インマゼールの館』で働くことになって、一番最初にしなくてはならなかったのは、肖像画のモデルになるということでした。インマゼールの館の一階廊下にはイレーヌやラシーヌ、また他に十数名いる高級娼婦たちの、あたかも貴婦人であるかのような大きな肖像画がかかっています。娼館へ遊びにきた男たちはみな、この肖像画を見てその夜誰と戯れたいかを決めるのでした。

城下町の三文画家シャハムは、化粧をして髪を結び、きらびやかな絹のドレスに身を包んだラプンツエラを見ると、いつも以上に創作意欲に燃えて、彼女の肖像画にとりかかりました。ところが彼は美の女神の顕現に酔い痴れるあまり、いつまでたってもその肖像画を完成させようとしなかった。業を煮やしたマルテは、彼女の目にはほとんど完成したように見えるラプンツエラの肖像画をイゼルからとり上げ、シャハムに金を払うと彼をさっさと店の外へ追いだしたのでした。

マルテはラプンツエラの絵を一階の応接間の奥の小部屋に飾り、客の中でも特別に裕福な男だけにそれを見せるつもりでした。他の娼館では実際の娼婦が肖像画よりも不細工だったりするのはよくあることでしたが、ここ、『インマゼールの館』は違います。マルテは日頃から娼婦たちの面倒をよく見ていて、彼女たちの栄養状態や精神状態などを小まめにチェックしていました。そして客が決してがっかりして帰ることがないように、自分の娘ともいえる娼婦たちに色々なアドヴァイスをしたり、様々な美容法を施してあげたりしていました。

娼婦たちはみなマルテのことを「ママ」と呼んでいます。確かに彼女は娼婦たちのお母さんともいえる存在だったと思います。ラプンツエラもまた娼婦たちの口の動きを読みとって、そのうちにマ

ルテのことを「ママ」と呼ぶようにさえなりました。最初にあんまりいやらしいことをされたのでラプンツェラはびっくりしたのですが、それでも養父の時とは違い、ラプンツェラはすぐに彼女たちのことを強く信頼するようになったのでした。そしてマルテや他の娼婦たちもラプンツェラのことを愛していました。ラプンツェラは料理の仕度や掃除、洗濯、裁縫など、誰にやれと言われたのでもないのに自ら進んでなんでもやりましたし、そんなせいもあってか、誰もラプンツェラが飛び抜けて美しいからといって、醜い嫉妬心を起こす者はいませんでした。そのかわり、ラプンツェラの美しい雪のように白い肌を手を伸ばしては、彼女の肉体を愛撫しようとする娼婦は何人がいたのですが。

マルテはラプンツェラが娼婦のみなに好かれ、小間使いのように家事仕事をこなしてくれるのを見るにつけ、この娘のことは店に出さずにおこうかとも思ったのですが、エドワール王子がお忍びでやってきた時に、やはりこっそり応接間の奥の部屋に王子さまをお通しし、美しいラプンツェラの肖像画を見せてしまいました。当然のことながらエドワール王子は一目でラプンツェラのことを気に入ってしまい、是非今宵自分の戯れの相手になって欲しいと、興奮してマルテに頼みこみました。

「まあ、エドワールさま。お気に召していただけて嬉しゅうございますわ。ラプンツェラは二階のアイリスの間におりますので、どうか一晩ごゆるりとお楽しみになってくださいませ」

マルテは扇子の内側でほくそ笑みながら、先に立ってエドワール王子のことを二階のアイリスの間へと案内し、少しの間ドアの外で王子に待っていてもらいました。そして伯爵令嬢のようにきらびやかに着飾ったラプンツェラに、相手はさる高貴な御身分のお方なのだから、失礼のないようにと耳元に囁いてキスをひとつしました。もちろん、ラプンツェラは耳が聞こえませんから、マルテが何を言ったのか、その意味はさっぱり理解できません。でも時々、ママがローズの間やヒヤシンスの間、スミレの間などに男の人を通してい

る姿を見ておりましたので　自分もその男の人を相手に何かをしなくてはいけないのだとは漠然と感じていました。

マルテはラプンツェラの耳が聞こえないことはエドワール王子にとくに説明済みでしたし、彼女は彼に「大人しい、いい子ですから、どうか優しくしてあげてくださいまし」と、アイリスの間に入っている王子に、最後にそつと耳打ちしただけでした。

「わかっているとも」

エドワール王子の目にはもはや、娼館の女主人マルテのことなどまるで目に入ってなどおりません。ただ欲望のままにラプンツェラのことを我がものとし、美しいドレスの下の肉体に耽溺したいということしか頭にありませんでした。もちろん、王子はそんなぎらついた欲望を人前で見せるほど慎みのない方ではありませんでしたし、彼は宮廷で婦人と接する時と同じく、＜高級＞娼婦のラプンツェラに優しく話しかけました。彼女の耳が聞こえないということはもちろんわかっているのですが、それでもやはり部屋に入った時には「初めまして」と挨拶し、それからラプンツェラの手をとりその上に接吻いたしました。

ラプンツェラは部屋に入ってきた男性が若く、そしてとても魅力的な方であることに驚き、すっかりまごついてしまいました。いつも他の娼婦たちの部屋に入っていくのは大抵　中年くらいの身なりがいい方ばかりだったからでした。もちろん時々お若い方もいらっしやいましたが、今自分の目の前にいる男性のようにハンサムな人を見たのはこれが初めてだと、ラプンツェラはそう思いました。

「ラプンツェラちゃん。君の手はほっそりとしていて、まるで白いバラの花のようだね」

そう言う王子はラプンツェラの手の手指の一本一本にいやらしく口接けしてゆきました。右の五本の指が終わると次は左の指、そしてその間にも彼の手は巧みに動いて、ラプンツェラのドレスの背中ポタンを外しています。王子さまは明らかにこの手の行為にお慣れになっというらしいらしく、指にキスをしただけで恥かしそう

に顔を赤らめ、震えてさえいるラプンツェラのことをとても愛らしくお感じになつていらつしやるようでした。

「君はまるで、小鳥のように愛らしいんだね、ラプンツェラちゃん。指にキスをしただけでこんなに震えてしまうなんて……」

レース飾りやりボン飾りをふんだんにあしらい、裾にフリルのある薄緑色の絹のドレスを丁寧に脱がせると、王子はラプンツェラの足から繻子の靴も脱がせ、今度は足の指の一本一本に口接けてゆきました。そして天蓋つきのふかふかしたベッドの上でラプンツェラの下着を一枚一枚脱がせると、彼の妃であるセシリアさまには決してなされたことのない　破廉恥な行為の数々をラプンツェラを相手になさつたのでした。

そうなのです。この時、エドワールさまは二十七歳で、すでにセラムネイト王国から娶つた妃、セシリアさまがいらつしやつたのです。けれどもいつもベッドの脇に従者が控えていて、ふたりの性生活を監視しているせいか、エドワールさまとセシリアさまの夜のご生活のほうはあまりしっくりいっていませんでした。おふたりの間にはまだ子供が誕生しておりませんでしたので、従者めは何月何日に夫婦が性の交わりをし、それが何時間、あるいは何分続いたかという記録をとっているものであります。このことはエスカルド王国の伝統のようなもので、王の妃が決して他の男と浮気をせず、間違いなく王さまの子を身ごもつたということを証明するためにずっと続いている、悪しき慣習のようなものだったのでした。

それはそうと、エドワール王子はラプンツェラの肉体を自分の欲しいままに弄ぶと、すっかり彼女が気に入ってしまい、手放したくなくなつてしまいました。そこで、すうすうという可愛らしい寝息を洩らしているラプンツェラの額にキスをひとつすると、下着やシャツ、ベストやズボン、ラシヤのジャケットに着替え、マルテがちょうど帳簿をつけている部屋へと彼は入っていききました。

「マルテ、実はおまえに折り入って大切な話がある。わたしのたつての願いと思い、どうか断らないでほしい」

「わたくしにできることなら、なんなりと」

マルテは鼈甲縁の眼鏡を外すと、エドワール王子に椅子を勧めました。けれども王子は「いや、このままで」と言い、なんとも落ち着かなげにビロードの絨毯の上を歩きまわっています。

「わたしは　　すっかりあの娘のことが気に入ってしまった。そこで彼女の身を買いつつて、自分だけのものにしたく思う。そのようなことは可能であろうか？」

「エドワールさま。それは結構なお考えでございますが、あの娘はお高つございますよ。いえ、お金の問題ではないと言っても過言ではありません。ラプンツェラは実際、お金以上に価値のある娘なのです。ラプンツェラは娼婦のみなに好かれておりますし、何より彼女たちの精神的な支えにさえなっているんです……正直なところを申しまして、わたくしもできることならあの娘を手放したくありません。ですが、エドワールさまがどうしてもおっしゃるのであれば……ラプンツェラにとつてもそのほうが幸せかと思えますので、親が娘の幸せを願うのと同じ気持ちから、あなたさまにお売りしたく考えますけれど」

「ふむ、よろしい」

エドワール王子はこれまで結構な金額をマルテに支払っておりましたので、彼女のことを内心（大したやり手婆だ）と思っていたのですが、今の言葉を聞いてマルテのことを少し見直しました。そこでジャケットの内ポケットから小切手帖をとりだすと、そこに好きな金額を書くように言ったのでした。マルテはなんのためらいもなく持っていた羽根ペンでそこにさらさらと金額を書きこみ、「いかが？」というように王子のことを見返しました。

「百万クラウンか。まあ、いいだろう。あの娘には実際、そのくらい値打ちがある。ただ、商談が成立したのはいいが、わたしにも彼女を迎えるためにそれなりの準備というものがあるのでな。それまでは決してラプンツェラに他の客をとらせないでほしい。言うまでもないことだとは思いますが」

「もちろんでございますとも、エドワールさま」
やり手婆マルテ・インマゼールはにっこりと微笑み、五十を過ぎてもいまだ容色衰えぬ美しい顔を、エドワール王子に向けたのでした。

<< 続く……。

第3話

ラプンツエラのほうでもまた、すっかりエドワール王子の虜になつていました。空色の瞳に柔らかい金の髪、整った輪郭線の中の、凛々しいお顔立ち……ラプンツエラはきのうの夜、王子の唇が触れた自分の肌が熱くなるのを感じ、思わずほつと溜息を洩らしました。昨夜、エドワール王子は非常に激しくラプンツエラのことを繰り返してお求めになりましたので、ラプンツエラの体の中で彼の唇が触れなかつたところはどこにもないほどだったのです。

今朝方、ラプンツエラが眠い目をこすりながら朝の食事の用意をしていると、マルテが包丁と鴨の肉を彼女の手からとり上げ、二階の奥の部屋へと閉じこめてしまつたのです。ラプンツエラがまだ小さかつた頃、ミッシェルはラプンツエラが悪いことをすると物置に閉じこめましたので、てつきり彼女は自分が何か悪いことでもしたに違いないと思ひこんだのでした。次から次へと娼婦たちが部屋へ入ってきては、喜んだり泣いたりしてさかんにラプンツエラのことを抱きしめるので、ラプンツエラにはさらに訳がわからなくなるばかりでした。

マルテはお昼頃、食事の席でラプンツエラがさる高貴な方に買われることになつたという話をみんなにしたので、どこかまだ気怠そうにしていた娼婦たちはその途端に大騒ぎになつたほどでした。でも結局はラプンツエラがお金持ちの貴族の愛人として、おそらくは未長く愛されるであろうと想像して　みんな、ラプンツエラの幸福を喜ぶことにしたのでした。中にはハンカチで涙をふいている娼婦さえいましたが、彼女たちは自分たちの唯一の汚れない清らかな乙女、心の支えがとり去られてしまうことを予感して、涙を流していたに違いありませんでした。

エドワール王子はそれから度々ラプンツエラの元を訪れては愛欲のかぎりを尽くして彼女の体を抱き、別れ際には彼女のためにい

かに自分が今着々と準備を進めているかについて語ってからお帰りになられるのでした。マルテは抜け目のないやり手婆でしたから、当然その間も王子さまからお金をせしめましたし、そのお金でインマゼールの館を改築したり増築したりしたのでした。

エドワール王子は王城の裏手にある広大な森の一角に、石造りの塔を建築すると、そこに贅を尽くした家具や調度品の数々を城下町の職人たちに作らせ、また運ばせました。いわばここはエドワール王子にとっては第二の家、あるいは本当にくつろげる家庭の場のようなものでしたから、王子はお金に糸目をつけずに、内装を豪華なものにしたかったのでした。

塔は五階建てで、中に調理室や小間使いのための部屋、食堂や番兵が休むための部屋などがありました。ラプンツェラがいる五階へは秘密の隠し扉を通っていかなくはなりません。そして螺旋階段を上りきった最上階の一室に、ラプンツェラは王子の手によって閉じこめられることになったのでした。

ラプンツェラはいつも、窓扉の外のバルコニーへ顔をだしては、エドワール王子が早くこられないかとそのことばかりを考えて日々を暮らしておりました。毎日、城下町のほうからラプンツェラに手話を教えるために先生がやってきましたが、ラプンツェラは勉強が大嫌いでしたので、彼がいる時に王子がやってきた時にはすぐ、エドワール王子の後ろに隠れてしまいうくらいでした。

王子は、なんとかしてラプンツェラと言葉を介してお話をしたく思っていましたので、自らも先生について手話を習っては、ラプンツェラに丁寧に優しく教えてあげたのですが……ラプンツェラが少しずつ手話を覚え、また石板に何度も何度も繰り返し字を書いて片言を覚えるようになった頃、その悲劇は起こりました。

エドワール王子はいわば、王城と裏の森の石の塔とを往復する二重生活を送っていらっしやったわけですが、王子としての務めを果たしたり、妃であるセシリアさまとの夜のご生活があったりと、多忙を極めておいででした。それでも王子にしてみれば、ラプンツェ

ラと過ごすひとときだけが、魂に安らぎを覚える憩いのひとときであり、その時間を捻出するためであれば、どんなことでも苦にはならないくらいでした。そしてラプンツェラと会って短い時間でも一緒にいると、また次に彼女と一緒に過ごせる時までがんばろうという生きる意欲がわいてくるのでした。

エドワール王子は小さな頃から星が好きで、王立大学院のほうで天文学をお修めになっておられますし、裏の森の塔についても星を観察するための塔だと、周囲の方々に説明しておられました。けれどもやはりある時から 妃のセシリアさまはエドワール王子の言動を不審に感じられるようになったのでございます。そこで密偵を雇い入れて調べさせたのですが、この密偵はある重大な王家の秘密にいきあたると、それきり口を閉ざしてしまいました。彼はセシリアさまに王子が石の塔にひとりの美しい女性を囲っていることまではお教えしたのですが、そのあと彼女が何者かということ調べておりますうちに、おそろしい真実に気づいてしまったのです。そこでセシリアさまにそのことをお伝えする前にエスカルド王国の頭脳である枢機卿リュミエールに相談したのですが 彼はその二日後、裏の森の湖で水死体となって発見されたのでした。

エドワール王子が裏の森にある石の塔に囲っている女性は王子の腹違いの妹御である可能性が高い リュミエールは密偵からそのように説明されますと、その場は「馬鹿な」と言って一笑に付したのですが、側近に調べさせましたところ、ふたりの人間が口を割りました。つまり、王妃づきの高齡の乳母と今は退職して田舎で隠居生活を送っているラプンツェラを西の森に捨てた元侍医です。

エドワール王子のお父上であるブライエンバツ八王は、最初の妃との間にエドワールさまを、そして次のお妃さまとの間に双子の赤ん坊をもつけられたのですが、ラプンツェラの双子の姉にあたるカミーユ王女は十四歳という若さで夭折しておられます。彼女はそれ以前から美姫として名高く、セシリアさまが雇った密偵はカミーユ王女の肖像画を見てすべてのことを確信したのでした。

彼はエスカルドの王室には双子が生まれるのを禁忌とする慣わしがあること、また王室の家系図には双子の妹が産後間もなく亡くなったと記されていること、さらに九十歳という高齢ながら、今も城下町で産婆をしている老女に話を聞き、すべての裏付けをとったのでした。

枢機卿リュミエールは、まずはこのことは一旦自分の胸にだけ収めておこうと考えました。そして娼館『インマゼールの館』のマルテ・インマゼール、仕立屋ウインスレットの店のレオノール・ウインスレット、また夫に先立たれて未亡人となったミッシェル・ラツシエラに多額の金を積んで口封じをし、ラプンツエラ・ラツシエラという娘が俗世間に存在した痕跡を消そうとしたのでした。

ラプンツエラの育ての親であるミッシェルは、その数日前に黒ずくめの男が訪ねてきて娘のことをあれこれ聞くのを不審に思っていました。彼は「ラプンツエラさまはさる高貴な方とお幸せに暮らしておいでです」との言葉を残していったのですが、どうしてもラプンツエラの居所だけは教えてもらえなかったのです。でも、今こうして立派な馬車に乗った執事のように身なりのいい人間が多額の金を置いていったところを見ますと　ミッシェルにはラプンツエラが幸せに暮らしているに違いないと確信できました。未亡人となり、夫の残した借金に苦しんでいたミッシェルにとって、そのお金は本当に何より有難いものだったのです。

ちなみに、『インマゼールの館』の女主人マルテはさらに大きな屋敷を建てて商売に励み、娼館をやめたあとはインマゼールという名の大きなホテルの経営者となったのですが　ホテル・インマゼールはこのあと数百年が経ち、王制から共和制に移行した今も、世界中の観光客から愛されるホテルとして非常に有名です。

>>続きます……。

第4話

つまり、ラプンツェラとエドワール王子は、互いに腹違いの兄妹とは知らずに愛しあっていたわけですが、結局エドワール王子は何も真実をお知りにならないまま、二十九歳という若さでお亡くなりになりました。おそらく原因は過労がたたったことではないかと思われませんが、王子はラプンツェラと愛欲に耽っているその最中に心臓発作を起こされたのでした。

このことは王家にとって大変な醜聞スキャンダルでしたから、侍医から報告を受けたリユミエールは、ブライエンバツ八王にさえ嘘をつきました。エドワール王子は裏の森の塔で星の動きを観測なさっている時に、心臓発作を起こされて亡くなったのだと　王も王妃も非常に嘆かれましたが、この時セシリアさまのお腹にはエドワール王子との間に宿った子がありましたから、この子がどうか男の子でありますようにと、周囲の人間はみなセシリアさまにすべての期待をかけました。けれども初めてのお産である上に、まわりからあまりにも期待をかけられたことがプレッシャーとなったためでしょうか、セシリアさまが早産で子をお産みになった時　その子は息をしておりませんでした。セシリアさまの乳母も老侍医も言葉もありませんでしたが、その時ある名案が、侍医の頭に浮かんだのです。

実はラプンツェラもまた、この半月ほど前にエドワール王子の子を出産していたのです。そこでこの老侍医はセシリアさまの死んだ赤ん坊とラプンツェラが生んだ男の子をすり替えることを思いついたのです。もちろんそのようなことは、彼ひとりの独断で決められるようなことではありませんから、この侍医は枢機卿のリユミエールにまずは相談しにいきました。

すると彼はすぐに、そうする以外に道はなかるかと老侍医に言い、「よくよく考えてみれば、これほど正統な王位継承者もないのだから」

と、立派な顎鬚をしごきながら、神に感謝さえしていたのです。何故なら、これでもし王権がブライエンバツ八王の弟の手に渡るということにでもなれば、彼が失脚せざるをえないのは、当時の政治的情勢から見て、まず疑いようのないことだったからです。

ラプンツェラは突然なんの説明もなく自分の子供を奪われて、その時以降少しノイローゼ気味になってしまいました。彼女の子をセシリアさまの子としたことは、彼女自身と彼女の乳母、そして老侍医と枢機卿リユミールしか知らないことでしたので、当然ながら周囲の間は、広い意味ではエスカルド王国の国民を含めて

この世継ぎとなる男の子の誕生を非常に喜びました。

しかしながら、いくら国家のためとはいえ、セシリアさまとしては心中、複雑なものがあつたに違いありません。何しろエドワール王子は初めて娼館でラプンツェラと出会つたその日から、セシリアさまにはもうなんの関心も抱いておられませんでしたし、彼女自身にもそのことがよくわかつていたからです。それでも結婚五年目にしてようやく子を授かつた時、自分がどんなに嬉しかったか、セシリアさまは揺り籠の中に眠る丸々と太つた元気な男の赤ちゃんを見るたびに、自分でもどうすることもできないどす黒い嫉妬の念にかられました。

セシリアさまは子供の養育はすべて乳母まかせにすると、自分は一月に百着もドレスを新調したり、王宮御用達の商人から宝石を買い漁つたりしては国のお金を散財するようになっていきましたが、それを止めることはもはや誰にもできないことでした。

一方、ラプンツェラはエドワール王子を失つた悲しみに加えて、子供まで奪われてしまい、すっかり生きる希望をなくしてしまいました。時々、塔のバルコニーから身を投げて死んでしまえたらどんなにいいかとさえ思う日々でした。けれどもエドワール王子が雇つた手話の先生が、『希望はある、君の心の中に』と言つた時から、ラプンツェラは少しずつ彼の話す言葉に生き甲斐を見出していくようになっていきます。それまでラプンツェラはお勉強なんて大嫌いだつた

のですが、愛する存在をふたりも失い、ぼつかりと空いた心の穴に突如として次から次へと言葉が湧きでるようになってきたのです。

そしてその数か月後には、ラプンツェラは普通の人が話すのと同じように手で話をすることができるようになっていましたし、さらにはまだ文法などは不完全でしたが、紙の上に短い文章を書いて表すこともできるようになりました。

「これは、奇跡だ」

以前聾啞学校で教えていたこともあるリシャル先生は、ラプンツェラの上達ぶりにすっかり舌を巻いてしまいました。ある意味で彼女は彼がこれまで教えたことのあるどんな生徒よりも優秀だったといってよいかもれません。そしてふたりの間には仄かに、教師と生徒を越えた愛が芽生えはじめていたのですが、塔を警護している番兵ふたりには、そのことが非常に面白くありませんでした。彼らはバルコニーから時々、リシャル先生の愉快な笑い声や、彼が楽しそうにラプンツェラのことを教えている話声を聞いて、先生に嫉妬を覚えていたのです。

ふたりはある時リシャル先生が森の道を戻っていくその後ろ姿をつけると、示し合わせて彼のことを槍で刺し殺してしまいました。そしていつかの密偵の時と同じく、彼の死体を湖に捨てたのです。

何しろ、ラプンツェラが森にある石の塔で暮らしているということは、国家機密にも等しいことでしたから、リュミエールといえどもこのふたりを罪に問えなかつたのです。むしろそのくらいこの番兵ふたりがラプンツェラのことを護衛する意識に燃えているのなら警護兵を新たに増やすよりも王女の身は安全に守られるに違いありませんでした。そうなのです。いまや、ラプンツェラはエスカルド王国の王女にして、今は亡きエドワール王子の妃であるだけでなく、さらにゆくゆくは王母ともなられる方でした。

枢機卿リュミエールはただの一度だけ、この数奇な運命の、気の毒な口の聞けぬ娘に会いにいったことがあります。その時彼がラプンツェラから受けた印象は次のようなものでした。

<波打つ金の髪に、深く澄んだ青い瞳、大理石のように肌目の細かい肌……確かに彼女は美しかった。これまでエドワール王子をはじめ、多くの男たちが魅了されただけの値打ちはあると思った。だがしかし、器量がいいが少々おつむのほうは足りないらしく、わたしが石の塔で会った時、彼女は何やら訳のわからぬ言葉をハミングするばかりだった。「ブーン。ブブブ、ブーン」……どのような美しさも、あのように知力が低いのでは無意味ではないかと、わたしにはそのように思われる>

実をいうと、その時ラプンツェラは生まれて一月にもならない赤ん坊を奪われたばかりの時でしたので、少し神経のほうが参ってしまい、非常な鬱状態にあったのでした。老侍医のルジエルもまた、毎日のようにラプンツェラを見舞っては、少しでも彼女が元気になるようにと気を遣いました。つまり、塔にやってくるまでの道の途中で花を摘んできてはラプンツェラの部屋に飾ったり、高価な絵本を持ってきては彼女の目が絵を楽しむようにしたのでした。

リシャール先生亡きあと、ラプンツェラの元にはもう誰も言葉を教えるにいく先生はありませんでしたが、侍医のルジエルはある時彼女が「ブーン。ブブブ、ブーン」と、手を羽根のように広げて飛ぶ真似をするのを見て、枢機卿リュミエールとは違い、非常に興味を覚えました。何故ならラプンツェラは部屋に一匹いた蠅を見て、その飛ぶ真似をしていたのですから……。

（もしやこの娘は、耳は聞こえぬが蠅の羽音の振動を理解しているのだろうか？）

その頃にはラプンツェラは、リシャール先生の熱心な指導のお陰で、石板や紙に書いた文字を理解できるようになっていましたからルジエル医師とも言葉を交わすことができるようになっていました。

『ラプンツェラ、君が今口にいるのはなんのことなんだい？』
石板に石筆でルジエル先生がそう訊ねますと、ラプンツェラは布でその文字を消し、すぐに答えを書きこみました。

「ハエよ、せんせえ。このまえせんせえくれたほん、ラプンツエラ、よんだ」

ラプンツエラはルジエール先生がくれた絵本をぱらぱらめくると、そこに描かれた一匹のハエの姿を指さしました。本の表紙には「昆虫の本」とタイトルが書かれています。

「なるほど」

そう石板に書いてラプンツエラに見せると、ルジエール医師はしばしの間考えこみました。ラプンツエラがほんの短い間に手話をマスターし、文字まで理解して文章を綴れるようになったことを考えると、もしかしたら、彼女はもともとは非常に頭のよい女性なのではないかという気がしてきたのです。何しろ元は王家の血筋を引いている方ですし、彼女の夭折した双子の妹のカミーユ王女は才媛として誉れ高い方でした。もしラプンツエラが幼少の頃より聾啞学校へ通うなりして正式な訓練を受けていれば、今以上にもっと色々なことに興味を持って積極的に取り組んでいたのではないか……ルジエール医師はそう考えると、この今は亡きエドワール王子の愛人であり、また彼の腹違いの妹、本来なら王女として何不自由なく暮らせる保証のあったラプンツエラのことを、あらためて不憫に感じました。

そこでルジエール先生は枢機卿のリュミエールに、ラプンツエラに今度は女の先生をつけてはどうかと打診しました。ところがこの枢機卿、実は大の女嫌いでしたので、「女は口が軽くて信用できない」と、そのように繰り返すばかりでまるで話になりませんでした。

「ルジエール先生、よく考えてみてくれたまえ。事は国家の重大事なのだよ。彼女がどの誰で、本当は何者なのか。そのことがもし知れ渡ったら、ラプンツエラには死んでもらわなくてはならなくなる。確かに石の塔に閉じこめられっぱなしで、不自由なことだろう。それはよくわかる。だがそれでも、死ぬよりは遙かによいではないか。よしんば彼女の正体が女教師の口からどこかに洩れようものなら、先生はいかがなさるおつもりか？その時にはあなた自身の

手で、仮にも一国の王女であり、王母ともなるう方に直接手を下す覚悟があるとしてもいうのなら、わたしも了承してもよいが」

流石にそこまで言われてしまつては、ルジエール先生もラプンツエラに女性の教師をつけるのを断念せざるをえませんでした。ただそのかわり、時間の許すかぎりラプンツエラに自分が勉強を教える許可を枢機卿からとりつけると、先生は城下町の古書店で彼女のための教材を買い漁つたのでした。

こうして、リシャル先生教師としての仕事をルジエール医師が引き継ぎ、ラプンツエラは真綿が水を吸収するように次から次へと知識を身に着けてゆきました。一日中、塔の外に出ることが許されぬ身の彼女としては、他に何かすることがあるわけでもありませんでしたし、何よりラプンツエラは先生がくださつた豪華な本の内容を早く理解したくてたまらなかつたのでした。

ところで、ラプンツエラの塔の護衛をしている番兵Aと番兵Bですが、彼らはルジエール医師がいかにも長く塔の五階で時間を過ごさうと、まったく嫉妬などしませんでした。何故ならルジエール医師は七十過ぎの少し耳の遠い老いぼれた爺いであり、リシャル先生のようにはハンサムでもなければ優越感に満ちた顔で「フフン」と鼻で笑つたりすることもなかつたからです。

それでも、ルジエール先生は七十過ぎの老いた身とはいえず、ラプンツエラに会っている間は自分が二十も三十も若返つたような気がしていましたし、時々彼女が診察のために胸元を開くのを見ては、次第にラプンツエラに抑えがたいある欲求を覚えるようになっていきました。年甲斐もなく恥かしいとは自分でも本当にそう思いましたし、妻の顔や息子や娘の顔、また幼い孫の顔などを思い浮かべようとしますので、結局彼はラプンツエラに対して邪で淫らな思いを抱いた時に、脳溢血で倒れて亡くなつたのでした。

誰もルジエール先生がラプンツエラの豊かな胸に興奮したあまり倒れたなどは知りませんでしたし、みな先生が亡くなったのは高齢のためであると信じて疑いもしませんでした。枢機卿リュミエー

ルはルジエール医師が倒れたあと、ラブンツエラの元には誰もいかせませんでしたし、彼女はリシャル先生とルジエール先生から受けた教えをひとりでおさらいしては、今度は独学で色々なことを勉強する他はなかったのです。

第5話

ラプンツエラの身のまわりの世話はルネというラプンツエラと同じ唾の娘がしていたのですが、彼女は器量が悪い上にやぶ睨みで、生まれてから一度としてにこりともしたことの無いような顔つきをした娘でした。

ラプンツエラにはルネが自分と同じ聾啞者だということがわかりませんでしたし、またルネにもラプンツエラが自分と同じように口が聞けないのだということが随分長いことわかっていませんでした。それでもルネは美しいラプンツエラのが好きでしたし、彼女がこれまで自分が仕えたことのある女主人のように何かとガミガミ叱ったり棒で叩いたりしてこないのは何故だろうと不思議にさえ思っていたのでした。

ある時、塔の五階に侵入した八エをルネが追いかけていると、ラプンツエラも手に持っていた本で彼女と同じく八エを窓の外に追いだそうとやっきになりました。ふたりはあんまり必死に八エを追いかけたので、最後には息も髪も乱れて顔が林檎のように真っ赤になっていました。

ラプンツエラとルネはお互いに顔を見合わせて明るく笑うと、ラプンツエラは手で何かを話そうとし、それが彼女に通じないことに気づくと、今度は石板に字を書きはじめました。

『おかしいわね』

ところがルネは両手をXに組んで首を振るばかりです。ラプンツエラは彼女には文字が理解できないのだとすぐにわかりましたが、今度は石板に八エの絵を描いてその下に「八エ」と文字を記しました。そしてさらにルジエール先生がくださった『昆虫の本』、その八エが描かれたページを開くと、ルネに見せました。

ルネはその本を大層面白いと感じましたし、チヨウヤトンボやカエルなど、身近にいる生物の絵をラプンツエラと一緒に熱心に見入

りました。その本を見終わると、ラプンツェラは今度は別の、革表紙に金箔を捺した、非常に高価そうな本を開いて見せました。それは挿し絵として版画をふんだんに使った、イエス・キリストの生涯についての物語で、ルネはその本を大変興味深く、慎み深い気持ちで、一枚一枚丁寧にページを繰ってゆきました。そして彼女もまたラプンツェラと同じく、その本の内容について何が書かれているのか知りたいという、熱狂的な何かにとり憑かれてしまったのでした。

こうしてルネはラプンツェラに文字を教わるようになり、この同い年のふたりの娘は主従の関係をこえて次第に仲睦まじくなってきました。ラプンツェラにはルネがいれば幸せでしたし、ルネもラプンツェラのそば近くで仕えることが何より、人生で幸せなことだったのです。

暫くの間、ふたりのまわりは平穏そのものでしたし、ラプンツェラの塔を護衛している番兵AとBがいつの間にか番兵CとDに入れ替わっていても、ふたりにはまるで何も関係のないことでした。実はこの番兵AとBはあることが原因で口論となり、Aは槍でBの心臓を、Bは剣でAの喉元を突き刺して互いに互いを殺してしまったのです。何故そのようなことが起きてしまったかと申しますと

ある時、番兵Bが小用を足しに塔の裏側のほうへまわりましたところ、その窓からラプンツェラが入浴しているところが見えてしまったのです。幸い、ラプンツェラの湯浴みを手伝っていたルネが、すぐに窓の外の男の気配に気づきましたので、彼女から水をかけられた番兵Bはそそくさと持ち場へ戻ったわけですが、鼻血を流している番兵Bに親友の番兵Aはこう聞いたのです。

「どうしたんだ、おまえ。頭が水で濡れてるぞ。その上、鼻血まで垂らしてるとは何ごとだ？」

「ああ、ちよつとな。でもまあ、それだけの値打ちはあったっていいから……へへへ」

「なんだよ、俺たち親友じゃないか。何があったのか話せよ」

「いいや、話せない。おまえが羨ましさのあまり卒倒するといけな
いから」

「そんなふうに言われるとますます気になるな。さてはまさかおま
え……」

「へへへ。実はちょっと覗いちまったよ。ラプンツェラさんが風呂
に入ってること」

番兵Aはすかさず番兵Bに殴りかかり、最後にはふたりとも

親友同士であるにも関わらず、殺しあいを演じるところまで感情が
昂ぶってしまったのでした。といってもラプンツェラもルネも耳が
聞こえませんが、ふたりが大乱闘を繰り広げていることには少し
も気づかず、ゆっくり湯浴みを楽しんでいたのですが。

枢機卿のリュミエルは番兵AとBが互いを槍と剣で刺して殺し
あつたらしいとの報告を受けると、その原因がなんであるかはおお
よそ見当がつきましたので、特に調査もさせずにすぐ番兵CとDを
ラプンツェラの塔に配置しました。彼らは特に王家に忠実な者でし
たし、給金のほうも二倍以上支払っていますから、これでもう何も
問題が起きることはないだろうと、リュミエルはそう考えました。
（それにしても、あの娘のお陰で一体何人の男が命を落とすのだろ
うな。エドワール王子に教師のリシャル、それに番兵AとB……
おそらくは王子と知りあう以前にも、そうした男が何人かいたに違
いない。おお、やっぱり女という生きものはおそろしいのう。くわ
ばら、くわばら）

枢機卿リュミエルはラプンツェラのことをそんなふうに思っ
ていましたが、大の女嫌いで堅物の彼だつて　もし彼女と出会つた
時に一匹の蠅が部屋に侵入していなかったら、どうなっていたかは
わかりません。もしかしたら悲しみに沈んだラプンツェラのことを
慰めているうちに彼女の虜となり、毎日のように彼女のいる塔へ通
っていたかも知れません。そうしたらエスカルド王国の歴史は少し
変わっていたかもしれませんが　なにせよ外交手腕に優れた彼
はその後もエスカルド王国の宰相として、エドガー王子の即位後も

その地位に留まり続けたのでした。

>> 続く……。

第6話

エドガー王子は可哀想な子供でした。彼が八歳の時にブライエンバツ八王が亡くなりますと、八歳にして王に即位し、お母上のセシリアさまが摂政の座に就いたのでした。その元で宰相のリユミエールは思うがままに政治的手腕を振るい、時の権力者として栄耀栄華を極めたと言われています。

エドガー王子はお小さい頃より母上さまとは離れてご生活しておいででしたし、彼女は莫大なお金をかけて王城のそばに壮麗な離宮を建造しておりましたから、普段はもっぱらそちらのほうにいるのです。いくら息子といえどもなんの知らせもなしにお母上とは会うことさえ叶いませんでしたし、時には従者を使いに行らせても「今日は加減が悪い」と言われて会えないこともしばしばでした。

エドガー王子は父の愛も母の愛も知らずに育ち、その上小さな頃から『王』という重責まで肩に背負わされて 自分が本当にしたかと思つたことなど一度もしたことがないくらいでした。いえ、そもそも自分が本当は何をしたのかさえまだその頃はまるでわかっていませんでしたし、ただ周囲の人間が言うとおり、まわりの人間が期待するとおりに振るまうことだけを心がけてきました。

エドガー王のご趣味といえば、ただひとつ狩猟くらいなものですが、しかもそれは彼の敬愛する母が大変嫌っている趣味なのでした。彼が狩猟へ出かけようとするとするたびに、「野蛮極まりない」と言つては蔑むようにエドガーさまのことを睨んでくるのです。ですから、エドガー王もそのことでは大変悩まれて、十四歳の時にとうとう狩へいくことを自分に禁じてしまいます。でも狩猟へいかなくなっても相変わらず母上が冷たい態度であることに気づくと もうセシリアさまの愛など一切求めないことに決めたのでした。そしてエドガー王は十六歳になる頃から再び貴族の若者たちを引き連れて狩猟へ出かけるようになり、そのたびに大物を仕留めてお帰りになられた

のでした。

ある時、エドガーさまがオオジ力を追いかけて王城の裏手にある森を馬に乗って駆けていると、ずっと遠くのほうに石造りの塔が見えました。エドガーさまはこの時結局オオジ力を見失ってしまったのですが、代わりに大層面白いものを発見したと感じて　その日はウズラとイノシシだけを獲物として捕らえると、上機嫌で城のほうへ戻られたのでした。

次の日、エドガーさまは再び森の奥へと足を踏み入れると、馬に乗ってきのう見た石造りの塔へ向かいました。きのう狩猟をともにした貴族の若者たちの話によりますと、それは彼の父上であるエドワールさまの、天文観測台でしようとのことでしたので　エドガーさまは肖像画でしか知らない父上のことをもつと知りたくて、急いでその塔へと馬を向かわせたのでした。

「きつとお父さまはあそこで、天文学の勉強をなさっておいでだったのだろう。僕も王立大学院へ入学したら、天文学を専攻しようと思ってるんだけど　母上は星の動きなど学んでも国の役には立たないなんて言われるし……」

エドガーさまはその昔リシャル先生とさる密偵が死体として見つかった湖のほとりを通りかかりますと、なんとはなしにとても悲しい気持ちになってきました。石造りの塔までは距離的にあともう少しでしたが、そこへいったところで結局、何か父上のことを忍べるものがあるわけでもないだろうと思っただけです。エドワール王の天体望遠鏡なら、王立大学院のほうに寄付されて、そちらで使われておりますし、何もないがらんとした石の塔までいっても、虚しい気持ちで王城へ引き返してくることになるかもしれない　エドガーさまはなんだかあの石造りの塔が自分のがらんどうの心の象徴みたく思えてきて、なんとはなしに足が重くなってきました。王城の大厩舎から出てくる時は冒険心で胸がはち切れんばかりであったにも関わらず、です。

けれども、塔の上のバルコニーにちらと女の人の姿が見えた時、

彼の心は一転しました。

(……人がいる！それも女の人だ！)

エドガー王は興奮した喜びに包まれて、森の茂みを一気に駆け抜けると、目指す石の塔へとようやく辿り着きました。

「どつどつー！」

王が栗毛の馬を止めると、ラプンツェラの塔の入口を守っている番兵PとQは、顔色を変えてエドガー王の元へと足を屈めました。

「王さまにおかれましては、本日もご機嫌麗しく……！」

ふたりは声を合わせて慌てたようにそう口上を述べようとしたわけですが、

「何故おまえたちにわたしの機嫌が麗しいとわかるのだ？」

王はにべもなくそう皮肉げに笑っただけでした。番兵PとQは顔を見合わせてうろたえるばかりです。

「まあ、それはよい。もしかしたらわたしの機嫌がこれから麗しくなるかもしれぬのでな。それもおまえたちの返答次第によって」

PとQは一体どうしてエドガーさまはこの場所のことをお知りになったのだらうと、冷や汗が流れるのを感じるほどでした。最悪の場合、王の御機嫌だけでなく、宰相リユミールさまの御機嫌さえ損ねることになるかもしれず、そうなると自分たちは首になるか、もっと悪ければあるいは……。

「何を黙っておる。わたしはここへ来る前に、この塔のバルコニーにあるご婦人が姿を現したのを見た。一体彼女は何者なのだ？何故このような場所にいる？ここは王の土地、すなわちわたしの土地であることはおまえたちも知っておらう。隠し立てするためにならぬぞ」

まったく王さまのおっしゃるとおりでした。しかもその上自分たち番兵はこの王さまを守るためにこそ存在しているようなものなのです。番兵PとQは親友同士ということもあり、互いに頷きあうと、意を決しました。

「ここには王さまのおっしゃるとおり、あるご婦人が暮らしておい

です。そして我らの役目は彼女を守ることでありませぬ。しかしながらこのご婦人の身分に關しては我々も何も知らされておりませぬし、また宰相リユミエールさまからは、決して誰をも近づけてはならないとの厳命が下っております」

「うむ。よくわかった。ふたりとも御苦労である。引き続き警護を続けよ」

王は馬からお下りになられると、番兵Qに馬の手綱を渡し、自分は塔の入口に入っていきました。そこでエドガー王と出会ったルネは驚き、手に持っていた金だらいを床に落としてしまったくらいでした。それは彼女が王さまの顔を知っていたからではなく、事実は彼女が誰なのかさえ知りませんでした。あんまり彼の容貌が優れているので、まごついてしまったせいでした。

「おい、女。ここから上へいくにはどうしたらよい？階段はどこにあるのだ？」

ルネは手をXに組み、首を振り続けましたが、エドガーさまは彼女が唾であるとは理解せず、さらに詰め寄りました。

「さあ、早く教えるのだ。宰相のリユミエールがなんと云おうとこの国で、しかもわたしの領地で知らぬことがあるなどというのは絶対に許せぬ」

エドガーさまはそう凄みましたが、ルネは怯えたようにしゃがみこんで震えるばかりでした。彼は溜息を着くと、自分で階段の在処を探そうとしましたが、ここには調理室と食堂、それに奥のほうに番兵とルネが休むための部屋があるきりでした。他に浴室と便器の置いてある小さな部屋がありました。それ以外にはどこにも階段などありません。

エドガーさまは大変頭のよい方でいらっしゃいましたから、手を顎にあてて目を閉じ、暫くの間考えことをなさいました。調理室に食堂、奥の間、小間使いの寝室らしき部屋、浴室、便所……そこですぐにピンときたのです。

彼は食堂の食器戸棚を仔細に調べ、すぐにそれが蝶番でうまい具

合に開けられるようになっていたのを発見したのでした。

「なるほどな。誰がこんな手のこんだ真似をしたのかは知らないが、なかなかよく考えてあるものだ」

そして王さまはこうまでして宰相のリュミエールが隠したい女性とは何者だろうと考えました。もしやあの堅物で、女嫌いとしても有名なリュミエールがこつそり愛人を囲っているとか？もしそうなら 自分はここで奴のよい弱味を握ることができる……エドガーさまは螺旋階段を上っていきながら、そんなことをお考えになっていました。

そして、とうとう鉄製のドアの前まで来た時、エドガーさまは思わず喉をぐくりと鳴らしていらっしやいました。でも何度ノックしても返事がないので、ドアの取っ手に手を伸ばすと、そっと中の様子を窺いました。

「ピチィ、ピチィ、チチチチ……」

途端、バルコニーのほうから鳥の鳴き声と、その羽ばたきの音が聞こえてきました。室内には大理石の暖炉が中央にあり、奥は寝室になっているようでした。繻子のソファに螺鈿の卓、飾り棚に衣裳戸棚、サイドボード、化粧テーブル、ビューロー、チェスト、コモード……などなど、それらはエドガー王が今現在お使いになっている自室の物とも引けをとらぬほど、精緻な細工を施したもののばかりでした。

エドガー王は驚きとともに部屋中をぐるりと眺め、最後に謎の婦人がいると思われるバルコニーのカーテンを引きました。そして彼がそこで見た人は 王さまがかつて見たこともなかったほど、美しい女性でした。

この時、ラプンツェラは三十四歳でしたが、俗世間の風に当たらずにずっとこの塔に幽閉されていたせいでしょうか、二十四といっても通用するような若さと美しさを保っていました。それに、彼女の顔の表情のおどおどとした悲しそうな何かが 一層強くエドガー王のお心を捕らえずにはいなかったのです。

「……怖がらなくてもよい。わたしはそなたを、ここから解放する者だ。さあ、こっちへきてわたしと話をしよう。何故そなたがこんなところで暮らしているのか、その訳をわたしは知りたい」

ラプンツェラがエドガー王の手におずおずと自分の手を伸ばすと、彼は挨拶がわりにラプンツェラの手の甲に軽く口付けました。彼女はもう何年もそんなことをされていなかったもので、ますますまごつきましたが、この若く凛々しい貴公子が一体なんのために自分に会いにきたのか。その理由を知るのが怖くてたまらなかつたせいでもありません。何しろもうかれこれ十五年以上もラプンツェラはこの塔に放つたらかちにされており、ルネ以外の誰かにあつたことなど、ただの一度もなかつたのですから。

ふたりは繻子のソファに腰掛けると、互いを探りあうようにちらと眼差しを交わしあいました。エドガーさまはラプンツェラの男なら誰もがうつつとりするような美貌に見とれていたのですが、それではないながらあんまりじろじろ眺めるとご婦人に失礼だとの心遣いから、彼女のことをちらちら盗み見ることにしかできなかったのです。

ラプンツェラはテーブルの上から石板を手にとりますと、そこに『あなたはだれ?』と石筆で書きこみました。エドガーさまはその時下で会った小間使いの娘のことを思いだし、おそらく彼女も今目の前にいる美しい人も耳が聞こえないのだと直感しました。そこで傷だらけの石板の上に『僕の名前はエドガー。君の名前は?』と素早く書きこんだのです。

『わたしの名前はラプンツェラ』
エドガーさまは「ラプンツェラ」と声にだして発音すると、その言葉の響きを楽しむように暫しの間瞳を閉じておられました。

『ラプンツェラちゃんか。君にぴったりなの、可愛い名前だね。ところで君は何故こんな風変わりなところにいるの?』

するとラプンツェラは悲しそうに首を振りながら、

『わからない』

と石板に書きました。

「わからないって……」

エドガーさまにはまったくさっぱり訳がわかりませんでした。このように美しい人を秘密の塔に隠しておくからには、何か理由なりの目的なりが必ずあるはずでした。エドガーさまがすぐに頭に思い浮かべた理由は次のふたつ。彼女がやんごとなき方の秘密の愛人であるか、あるいは彼女自身が何か罪を犯してこの塔に幽閉されているかのいずれかだろうと考えたのです。

『ここへは、時々誰か人がきたりするの？』

エドガーさまは消去法によって答えを得たく思い、そのようにラプンツェラに訊ねました。ところが、

『いいえ、誰も。ルネ以外は誰もきません』

『ルネってだれ？』

『わたしの身のまわりのことを色々してくれる人です。彼女はとても優しいのです』

エドガーさまは予想していた答えが得られず、大変頭を悩まされることになりました。このことはいかに頭脳明晰な彼といえども、なかなか解けぬ難問であるように思われましたし、何よりこれほど美しく清純そのものであるかのような女性が何か罪を犯したなどとは、エドガーさまには想像もできないことでした。第一、よくよく考えてみれば王の領地内で愛人を囲うなど、そのようなことが露見した日には宰相リユミエールといえどもただですむようなことではありません。

（となると、このことがわたしに知れたとしても、あの男には何か言い逃れることができる口実があるわけだ。何か、それならば仕方がないとわたしが納得するように理由が……）

エドガーさまは暫しの間目を閉じ、顎に手をやって考えごとをなさいました。ラプンツェラがこのように豪華な家具類や調度類に囲まれた部屋で暮らしているということは、それはそのまま彼女の身分の高さを示しています。先ほど調理室のテーブルの上には鶉の卵や血抜きをした鴨、種々の野菜や果物などが置いてありましたが、

ああしたものは必ず、王城にある食料貯蔵庫から運ばれた食材に違いありません。その他にも、ラプンツェラの生活に入り用なものを運ぶ係の人間がいるはずですし、そうまでして彼女のことを生かしておくからにはそれ相応の理由があるはずでした。

（そうなるかと、一番考えられるのは父上がお祖父さまの愛人だったということか？あるいはお祖父さまの愛人が子を生み、それが彼女だったとは考えられないだろうか……もしそうなら、自分と今日の前にいるこの人は、血が繋がっているということになる）

そしてエドガーさまはふと、あることにお気づきになられたのでした。王家の間に飾られている、ある女性の肖像画にラプンツェラがとてもよく似た面差しをしている、ということに。そこで彼は（間違いない）と、頭のよい方が往々にしてそうであるように自分の推理を絶対のものとして確信しました。

（ラプンツェラはたぶん、お祖父さまの愛人の娘であるに違いない。僕のお父上は二十九歳という若さで亡くなっておられるし、よしんば彼女がお父上の愛妾であったとしても、ただそれだけの理由でこんなところに幽閉しておくはずがないではないか。さらには彼女がお父上の愛人の子だなどということは、年齢的にいつてまず考えられない！）

「ラプンツェラ」

エドガーさまはあらためてラプンツェラと向き直りますと、彼女のほっそりとした白い手を取り、彼女の深い色をした青い瞳に真っすぐな眼差しを注ぎました。

「僕が必ず、君をこの不自由な生活から助けだしてあげる。そしてこの先も何不自由のない生活を保証してあげられたらって、そう思うんだ。いずれにしても、僕は決して君を悪いようにはしないよ。それだけは神に誓ってもいい」

エドガーさまは十字を切ると、ラプンツェラの薔薇色をした頬にそっと口付けました。そして名残惜しそうに彼女の手を離し、その日はそのまま石の塔の螺旋階段を下りることにしたのです。

第7話

「リュミエール！リュミエール卿はいるか！」

王は城へ戻られますと、宰相が仕事をしている部屋に入るなり、そう大声で叫ばれました。執務室の机の上で巻き物を読んでいたリュミエールは、何事かと思い、書記に一旦部屋から下がるよう命じてから、王の御前に姿を現しました。

「これは一体何ごとですか、王よ」

エドガーさまはそれまで書記が腰かけてリュミエールの口述を筆記していた椅子に座りますと、机の上に肘をつかれました。

「おまえ、わたしに何か隠していることがあるだろう。それも、お祖父さまのブライエンバツ八王のことで」

リュミエールはとんと心当たりがありませんでしたから、はて、というように首を傾げました。彼にとつてはラプンツェラの存在など、今は大した問題ではありませんでしたので、彼女のことがすぐに思い浮かばなかったのも無理はありません。その上、先代の王のブライエンバツ八陛下のこととなると……リュミエールにはエドガーさまが何を申されているのか、まったく見当もつきませんでした。「とぼけなくともよい。わたしはもうすべてを知っているのだ。よし、ここはひとつおまえにヒントを与えてやろう。まずはヒントその一」

エドガーさまは博識なリュミエールをやりこめてやれるのが楽しくてたまらないご様子でした。何故ならこの骨ばった魚のような顔をした男はこれまで、勿体ぶった顔をして事あることに説教ばかり垂れてきたからです。

「裏の森にある石の塔。ヒントその二、その塔に住むラプンツェラという名の絶世の美女……これでもまだ王であるわたしをたばかるつもりか、リュミエール」

宰相リュミエールの顔色は、エドガーさまが思った以上に青ざめ

ていました。彼の手から巻き物が落ち、どこまでも床の上を滑ってゆきましたが、彼はそのことにさえまるで気づいていない様子でした。

「一体、どこでそれを……ああ、エドガーさま。番兵どもは一体何をしておったのか。あれだけわしは人を近づけるなど……」

「彼らを責めるのはお角違いというものだぞ、リュミエール。わたしはたまたま狩猟をしている時にオオジカを追っていて、偶然あの塔を発見したのだ。そして彼女が何者なのか、大体のところ見当がついた」

「……王はあの方に、お会いになったのでございますか？」

「いかにも」と、エドガーさまはさも得意げに頷かれました。「あのような美姫、いつまでも隠しておけると思ったか、リュミエール。何しろわたしとラプンツェラは血が繋がっておるのだからな、もうあのように不自由な生活だけは絶対にさせぬぞ。今日はそれを言うたくてわたしはここへきたのだ」

「そ、それでは王は、真実を……それともあの女が何か申したのでございますか？お父上のエドワールさまのことを……」

リュミエールは慌てて巻き物を拾い集め、またその中の一巻を巻き直しましたが、なかなかうまくゆきません。ラプンツェラがもし王城の、セシリア王大後の目に入るところにでも住むことになったとしたら、自分の今の地位とて磐石とは言えなくなってくるかもしれないのです。こんなことなら真実が露見する前にあの女を殺しておくのだった……リュミエールはそう苦い思いで後悔さえしました。

「お父上がラプンツェラと何か関係があるのか？」

この時エドガーさまは初めて、自分の推理がもしかしたら外れているのかもしれないと思いました。そしてリュミエールのほうでもまた、もしかして王は何か勘違いしておられるのではないかという可能性に気づいたのでした。

「エドガーさま、ラプンツェラは本来なら王家に存在するはずのな

い女性なのです。にも関わらずああして彼女のことを生かしておいているのは、耳の聞こえぬ気の毒な方であればこそ……王さまにおかれましてはよくよく御配慮くださいますよう、このリュミエール、頭を低くしてお願いする以外ございません」

そう言って宰相が深々とエドガーさまのことを拝しましたので、王は組んでいた足をほどくと、椅子から立ち上がりました。

「わたしに向かつて頭など下げなくともよい。わたしはただ……真実が知りたいだけなのだ。ラプンツェラはブライエンバッハ王の子なのだろうか？王家の間にある肖像画……父上の妹のカミーユさまにラプンツェラはよく似ておるではないか。リュミエール、観念して白状しろ。さもなければ、いかにおまえといえども……」

「王よ、どうかお許しを。そのことはいかにわたしといえども、口には出せぬことでございますゆえ。賢明なる王におかれましては、裏の森の塔のことも、そこに住む美しいご婦人のこともお忘れになつていただきたい。以前彼女に言葉を教えたことのある侍医がわたしにこう申していたことがございます。ラプンツェラに塔に閉じこもりきりの生活はつらくはないかと聞いたところ、「生きているだけで幸せ」との答えが返ってきたと……王よ、決して滅多な考えは起こされませぬ。王がよかれと思つてラプンツェラに対してしたことが、かえつてあの耳の聞こえぬ気の毒な方を苦しめる結果にだつてなるやもしれませぬ。どうかそのことをお忘れなさいませぬ」

「……わかった」

エドガーさまは低くそう呟くと、王衣を翻して宰相の執務室から出ていかれました。この時エドガーさまにはつきりわかつたのは、ラプンツェラがブライエンバッハ王の子であるということと、ラプンツェラを王城へ連れてくるのは、確かにリュミエールの言うとおり彼女を幸福にしないかもしれないという、そのふたつのことだけでした。

（生きているだけで幸せ、か……）

果たして自分なら、同じように思うことができるだろうか。エドガーさまは考えました。たぶん自分なら、耳の聞こえないことを神に恨み、またあのような人の寄りつかぬ塔に幽閉されることになった運命を呪うだろう。それなのに……。

エドガーさまはラプンツェラの健気さにすっかり打たれると、せめて少しの間でもあそこから出して外の空気を吸わせてあげたいように思いました。

（可哀想に。彼女が何か悪いことをしたから耳が聞こえないわけでも、あんなところへ閉じこめられることになったわけでもないだろうに……）

王はその夜、ベッドの中で、ラプンツェラが何かあの塔の中でも楽しめることはないだろうかと考えながら眠りにつきました。ラプンツェラの顔がちらついてなかなか眠れなかったエドガーさまは最後に、せめても彼女が幸せであるようにと神さまに祈ってさえました。王さまは生まれてこの方そのように敬虔な気持ちになったことは一度もなかったため、心の内側に芽生えた新しい兆しに自分でも驚きながら、眠りの底へと落ちていったのでした。

それから王は毎日のように、時間の許すかぎり、裏の森の石の塔へと出かけてゆきました。そしてよく晴れた日には湖のほとりまでふたりで仲良く散歩をしたり、またルネも誘って三人でピクニックを楽しんだりしました。エドガーさまは自分の後を尾けてきたリュミエールの側近の姿に気づいていましたが、あえて気にしないことにしていました。それよりも、うさぎやリスが森の中を動きまわる姿を見ては嬉しそうにはしゃぐラプンツェラの姿を、野生動物よりもなんて愛らしいのだろうと思っただけと見つめていました。

そうなのです。王さまはラプンツェラの塔に通いはじめて一月と経たないうちに、彼女のことを愛しはじめていたのです。

樹の影に隠れているリュミエールの側近にそこまで気づかれることはないだろうとエドガーさまは思っておられたわけですが、実を

いとうと宰相のリュミエールはそのことをこそもつとも心配して、側近に様子を窺わせていたのです。

「ふうむ、やはりな」

リュミエールは側近のひとりからエドガーさまは塔の女性に恋をしているらしいとの報告を受けると、すぐに従僕たちに馬車の用意をさせて、自ら裏の森のラプンツェラの塔へと向かいました。途中から長い距離を歩かねばなりません、この際仕方がありません。何しろ王立学院でエドガーさまが単位をとるために授業をお受けになっている時しか、王に気づかれないうちで行動を起こせる機会はないのですから。

宰相リュミエールは石壁の塔を見上げると、十六年ほど前にここへ初めて訪れた時のことを思いだそうとしました。そしてあの頃に比べればラプンツェラも年老いて、よもや十六も年下の青年を魅了するだけの美しさは残っておるまいと、そのように想像していたのですが、側近の報告によりますと、「エドガーさまが夢中になるのも無理のない美女」ということではありませんか。

（やれやれ。まったく男というのはどいつもこいつも……）

リュミエールは側近の目の中にもやや尋常ならざる色が垣間見えるのを思いだして、螺旋階段を上りながら軽い目まいを覚えたほどでした。しかしながら、彼もまたラプンツェラが十六年前と同じくあるいは十六年前以上に美しく艶やかで、澁刺とした生氣あふれる女性であることに気づくと、エドガーさまの胸中を察して心が鉛のように重くなってゆきました。

つまり、彼としてはこういっつもりだったのです。ラプンツェラも年老いて、流石にお若いエドガーさまのお心までは掴めまい、とそれなら、せめてもの償いの気持ちもこめて、実の母と息子が会うことくらい許してやろうと。リュミエールはエドガーさまがお小さい頃より、セシリアさまから冷たい仕打ちを受けてきたのを知っているのでそう思ったわけですが、自分はただの偽善者であると思いが知らされるばかりでした。

リュミエールは持つてきた紙に時候の挨拶やら何やら、持つてまわった文句を並べ立てたあとで、『あなたはエドガーさまが誰か知っていますか?』となるべく平易な言葉を選んで紙の上に書き記しました。ラプンツェラは突然彼の言葉がわかりやすくなったので喜び、『もちろん知っています』と彼からもらった紙に羽根ペンでさらさらと書きました。まだコツがあまりよくつかめないせいか、先頭の文字はかなり滲んでしまいましたが。

そう返事が返ってきて、リュミエールは驚いたのですが、それなら話は早いと思ったその矢先 『エドガーさまは王さまなのだそうです』と、宰相をがっかりさせる言葉が続いたのでした。

(そうか。彼女は連れ去られた自分の息子がよもや王さまになつていようなどとは想像もできなかったのだろう。無理もない。だが真実を話して、彼女のほうから思慮分別のある態度でエドガーさまとは接してもらわねば……)

『ラプンツェラ、あの方は貴女が十六年前に生み落とした息子なのですよ』

ラプンツェラはリュミエールが紙に書いた言葉を理解するのに、三十秒ほどかかりました。そしてシヨックのあまりソファから立ち上がった拍子に、インク壺をシルクの絨毯の上にこぼしてしまいました。

実をいうとラプンツェラは、エドガーさまの面差しに今は亡き最愛の方の姿 エドワール王子の面影を重ねていたのでした。彼がこの塔にきてくれるようになってから、ラプンツェラはまるで時間の螺子が昔に戻ったようだとさえ感じていたのに、こんなことって…… (あんまりだわ) と、ラプンツェラは重い悲しみに打ちひしがれました。

『エドガーさまはあなたに恋をしておいでのご様子。でも忙しいわたしがわざわざ時間を割いて何故ここまでやってきたのか これでおわかりいただけでしょうな?』

ラプンツェラにはもはや、言葉もありませんでした。絹のドレス

の裾がインクで汚れているのもなんとでも思わず、震える手で羽根ペンを握りしめていました。

リュミエールは自分の用向きが片付くと、バルコニーから下の番兵たちに声をかけ、小間使いに上へあがってくるよう命じさせました。さらに彼は最後に、残酷にも「わたしはもう二度とエドガー・エドワール・ド・エスカルド王にお会いしません。また王さまが来られても面会を拒絶することを誓います」という書類にサインさせました。ラプンツェラはそこに書かれていることの意味を理解はしましたが、ほとんど自動的に勝手に手が動くような感じで「ラプンツェラ・ラッシエラ」と拙い文字でサインしただけでした。

「よろしい」

宰相リュミエールは満足気ににんまりと笑い、インクが乾くのを待つてからその書類を巻いて黒衣の内ポケットにしまいこみました。そして証拠隠滅のために自分がラプンツェラに質問した紙とラプンツェラが自分に答えを書いた紙の両方を暖炉の火の中に捨てたのでした。

ルネはいけ好かない魚類系の顔をした男がきた時から、なんとなく嫌な予感がしていましたし、シルクの絨毯からインクの染みをとろうとしながらも、ラプンツェラが何かエドガーさまのことで消沈なさっているのがはつきりとわかっていました。それで思わず、リュミエールが王城へ帰ろうとするその後ろ姿に、洗濯の汚水をぶっかけてやったのですが、番兵PもQも「宰相さまになんてことをっ！」などと目の色を変えたりはしませんでした。彼らにもまた、どうせリュミエールはろくでもない用向きでラプンツェラさまに会いに来たに違いないということがわかっていたのでした。

リュミエールはあまりのことに言葉さえなかった様子ですが、何しろ少々おつむの足りない唾の娘のしたことですから、大目に見るしかありません。彼は「ぶわーくしゅっ！」と奇妙なくしゃみをひとつすると、ラプンツェラの塔から足早に去ってゆきました。

>
>
続<
.....
。

第8話

ルネはラプンツェラのお召物を着替えるその手伝いをし、またそれが終わると今度は絹のドレスの染み抜きをしようとやつきになっていたわけですが、ラプンツェラは「もういいのよ」と言うように、ルネの手が忙しく仕事をしようとするのを止めました。

その日、エドガーさまがラプンツェラの塔へやってくると、彼女は早速石板に『もう会えませんが』と、しおれた花のように弱々しく別れの言葉を書きはじめました。

『なぜ？』

当然ながらさかさそう、エドガーさまは聞かれました。そしてすぐにピンと直感が彼に教えたのです。これはおそらく、宰相のリュミエールが関係しているに違いないと。

『この絨毯どうしたの？』

エドガーさまは質問を変えましたが、ラプンツェラは悲しげに首を振るばかりでした。

『なんでもありません。インク壺を落としてしまったのです』

「ふうーん」

王はラプンツェラが何か隠し事をしてしているとわかっていましたが、彼女を苦しめたくありませんでしたので、それ以上は何も追求されませんでしたが、何しろ自分はこの国の王さまなので、宰相のリュミエールがなんと言おうと、ラプンツェラには絶対に会いに来続けるつもりでした。

エドガーさまはいつもしているように、ラプンツェラのほっそりとした白い形のよい手を撫で、そこに口付けしようとしたが、彼女はすぐに手を引っこめてしまいました。そしてもう一度石板に、『どうかお帰りを』と書きこんだのでした。

流石にこれには彼もムツとしましたが、このくらいのこと諦めるようなエドガーさまではありません。エドガーさまはかねてより

したいと思っていたことを実行にお移しになりました。すなわち、ラプンツェラのほんのり赤く色づいたような唇に、自分のそれを強引に重ね合わせたのでした。

ラプンツェラは戸惑いながらも、石板に手を伸ばそうとしましたが、エドガーさまがそれを奪ってしまいました。彼はラプンツェラの手を強引に引っ張って寝室のベッドのところまでゆくと、彼女をそこに座らせました。エドガーさまはいつも、この天蓋つきのベッドの存在が気になって仕方がなかったのです。王城の自分の寝室にだって、同じように四本の柱に彫刻が施されていましたが、エドガーさまはとりわけラプンツェラの寝室のベッドのほうを気に入っていたのです。羽根枕からはほんのりと薔薇の香りが漂っていますし、柱の一本一本に船首像の女人柱に似た像が刻みこまれています。エドガーさまは以前からずっと、「何もしない」と約束した上で、ラプンツェラとこのベッドの上で寝てみたくてたまらなかったのです。

『何もしないよ』

エドガーさまは石板にそう書くと、困ったような顔をしたラプンツェラに、

『僕は少しここで眠るけど、その間、君にそばにいてほしいんだ。そのくらいいいだろ？』

王はラシャ織りのジャケットを脱ぎ、革のブーツを床の上に放りだし、ベッドの上にもぐりこむなり、あっという間に眠りの世界へ落ちてゆかれました。ひとり現実の世界にとり残されたラプンツェラは、こんなにも大きく立派になった息子の顔を眺め、ぼろぼろと涙をこぼすばかりでした。

もう二度と会えないと思っていたのに、でも、運命はなんて残酷なのでしょう！ラプンツェラは自分でも、我が子の幸福を祈るところこそ母の勤めと繰り返し返し自分に言い聞かせようとしたのですが、もう何もかもが無理でした。もし、彼がこの塔を訪ねてくることになかったとしたら、ラプンツェラもルネとふたり、それまでと同じ

ように平穩に暮らしてゆくことに耐えがたい苦しみなど覚えたりはしなかったでしょう。でももうすべてがラプンツェラの心の中では終わってしまったのでした。そしてもう二度と新しい扉が開かれることはないのだと思うと　ラプンツェラの魂は死んでしまいうしかなかったのです。

ラプンツェラは愛しい人の柔らかい髪を撫で、神さまに彼の加護を繰り返し何度もお願いすると、自分の遺書を枕元に置きました。彼女はふらつくような足どりでバルコニーまで歩いてゆき、涙でぼやけた視界にいつもの見慣れた景色を収めたあと　そこから真っ逆さまに墜落しました。即死でしたので、少しも苦しみはしませんでした。

「あーあーあーあーあーあああっ！！！」

エドガーさまが次にお目覚めになったのは、外から奇妙な女の叫び声がしてのことでした。部屋の隅にある柱時計に目をやると、時刻は午後の四時でした。半刻にも満たない時間、自分は眠っていたに過ぎませんでした。こんなにぐっすり眠ったのは生まれて初めてだとさえエドガーさまは思いました。彼は少し寝ぼけていたせいもあって　外の尋常ならざる気配に気づくのに遅れたのです。

「……ラプンツェラ？」

彼は身を起こそうとした時に、枕元の紙切れの存在に気づき、何気なくそれを開きました。外からはルネの絶叫がしています。エドガーさまは恐ろしい思いでその紙片に急いで目を走らせました。

<エドガーさま、さようなら。

ラプンツェラはすっかり生きることに疲れてしまいました。わたしはあなたの本当のお母さんだと　リュミエールさんはそう言うのです。何故こんなことになってしまったのか　わたしにもわかりません。ラプンツェラはただ、エドガーさまが立派な王さまになつてくださることを望みます。ただひとつ心残りなのはルネのこと。

どうか彼女のことだけは、王さまのお力で守りくださいますようお願いいたします。ラプンツェラの最後のわがまを、どうかお聞き届けください。

ラプンツェラ・ラツシエラ >

「……ラプンツェラ！」

王がバルコニーの外を見下ろした時　そこにはラプンツェラのことを抱きかかえる番兵ふたりの姿と、狂ったように泣き叫ぶルネの姿がありました。死してなおラプンツェラは美しかったのですが、彼女の魂はもはやその肉体の中に生きてはいませんでした。ラプンツェラが餌付けしていた鳥が窓辺にやってきて、エドガーさまのことを慰めるように囁きましたが、王にはもう何も　その時聴覚が一時的に遮断されたようになって、何も耳に音が入ってきませんでした。

これがラプンツェラとエドガー王の、悲しい恋の別れ、血の繋がった母と息子の、許されぬ愛の終わりだったのでした。

>> 続く……。

第9話

エドガーさまはこのことで宰相のリユミエールを恨んだりはしませんでした。将来的に彼のことをなんとか失脚に追いこんでやろうとも考えませんでしたし、ただ彼にラプンツェラを王家の墓に

彼女の双子の姉のカミーユ王女の隣に埋葬してはもらえまいかと頼みただけでした。本当なら、リユミエールはそんなことを決して許しはしなかったでしょうが、自分の心にも罪の負い目があるために、王にそのことを承認したのでした。

セシリア王太后は決してよい顔をなさいませんでした。それよりも家系図では彼女の息子であるはずの王が眞実を知ったことのほうに強い怖れを抱き、摂政の位を下りてからは離宮から滅多に外へは姿を見せなくなつたのでした。

エドガーさまはその後間もなく、セシリア王太后の母国、セイラムネイト王国から妃を娶りました。セシリアさまの姪であるエルシア王女は、高慢な顔つきをしてはいましたが大変お美しい方で、エドガーさまはほとんどセシリアさまの言うなりになるような形で結婚なさつたのでした。

ところで、ラプンツェラに長年仕えたルネですが、彼女は王城の開かずの扉に監禁されるといふ生活をその後八年送つたあと、肺病にかかつて四十二歳という若さで亡くなつています。実はルネはエドガーさまの隠れた愛妾でした。王がラプンツェラを失つた悲しみを共有できるのは唾のルネだけでしたし、何かと虚栄心の強いエルシア王妃に嫌気が差すようになると、王は従順で素直なルネのことを愛しはじめようになつたのでした。

エドガーさまが最初にルネのことをお求めになつたのは、彼が結婚を間近に控えた時のことでした。その時エドガーさまは本当にルネのことが欲しかったというわけではなかったのですが、高慢ちきで気位の高いエルシア王女に初夜の床で笑われたくないという虚

栄心から、ルネのことをいわば実験台のような形で利用したのでした。

ルネはルネで、王はラプンツェラさまをお失いになったばかりでお寂しいのだろうと思っていましたし、彼女は他の男たちにも似たような扱いを受けたことがありましたので、エドガーさまのことを軽蔑するでもなく、ただ彼という存在のすべてを受け容れたのでした。

エドガーさまが毎日のおつけになっていた日記を読みますと、エルシアさまについてはくお飾りの王妃>という辛辣な表現が頻繁に使われていますが、エルシアさま御自身は 実をいうとエドガーさまのことを本当に心から愛していたのでした。ただ、本人がそのことに気づいていなかったというのは、気の毒なことだったかもしれませぬ。彼女は一国の王女としてのたしなみと慎み深さから、ベッドの中では常に感じていない振りをなさっていました。それはもちろん、寝室に控えてくだらぬ記録をとっている役人の姿が気になったせいでもあるでしょう。エドガーさまはルネを相手に性的な支配欲と万能感を充足される術を心得ておられましたから、彼は役人の目など気にせず堂々と、エルシアさまのことを王妃としてではなく自分の妻として扱ったのですが 彼女はベッドの中でも常に王妃であることに拘り続けました。

また、エドガーさまの日記にはエルシア王妃についてく冷たい氷の女王>という表現がたびたび用いられているのが目につきますが、それは彼女にしてみればただ表面だけのことにしか過ぎませんでした。確かにエルシアさまは御自身の容貌に自惚れていらつしやいましたし、虚栄心の強い方であったというのも事実です。でもそうした生まれ持った御自身の性質にエルシアさまが誰より一番苦しまれたのでした。エルシアさまは王の愛撫に感じていない振りをなさつていながらも、本当は感じていらつしやいましたし、時々エドガーさまにはしたなくも「もっと、もっと」とせがみたい衝動に駆られたことが一体何度あったことでしょうか。でも彼女のその衝動を押し

留めたもの　それは王城のどこかにある開かずの間に、王が密かに愛人を囲っているらしいという噂でした。

エルシアさまは嫉妬のあまり、秘密探偵を雇い入れて王の愛妾がどんな女性なのか探りを入れようとしたのですが、能なしの密偵はふたりとも死体となって戻ってきましたし、虚栄心の強い彼女としては（わたしよりも美人なのかしら？）と、そのことが気になっていつも頭から離れないくらいでした。そこでエルシアさまはほんのささやかばかりの夫への復讐として　夜の闇ねやでは決して自分から体も心も開かないことを堅く決心したのでした。

果たしてエルシアさまが、王の愛妾が自分とは比較にもならないほど不器量な、やぶ睨みの唾であることを知ったとしたら、どうお思いになったことでしょうか。おそらくそう素直に「勝ったわ！」と言って喜ぶことはできなかったのではないのでしょうか。そして自分になっているのと同じ破廉恥な行為の数々を彼女と見張りもなしに楽しんでることを想像しては　嫉妬という名の狂気にとり憑かれてしまっていたかもしれません。

一方、王のエドガーさまにとってルネの存在は自分の心の唯一の癒しのようなものでした。王御自身は気づいていらっしやらなかったようですが、彼にとってルネというのは人間の女の姿をした愛玩動物　つまりペットのようなものでした。ルネは王城の開かずの間に閉じこめられて、日の光を見ることさえ許されませんでしたので、唯一エドガーさまがきてくださることだけが心の楽しみだったのです。

ルネは最初の頃、王さまが一日やってきてくださらないだけでもとても心配で、彼がもう二度と自分に会いにきてくれなかったらどうしようと、そのことばかりを考えて暮らしておりました。そしてエドガーさまがやってくるたびに、ルネが哀願する犬のような眼差しで駆け寄ってくるのを見て　王はエルシア王妃にはないルネの素直で従順な心を喜んだのでした。

エドガーさまは耳の聞こえないルネを相手に、政治の愚痴やら王

妃への不満やらをぶちまけ、酒に酔って気持ちが悪くなったところでいつも、ルネを相手に倒錯的な性の遊戯をお楽しみになりました。彼女の体を紐で縛ったり、時には鞭でぶったり……普段は口を開かないルネが時折もらすあえぎ声を聞きたいがためにエドガーさまは、次第にそうした性行為をエスカレートさせていったのでした。

ルネが肺病を患って亡くなった時、エドガーさまは彼女への愛情から、もう二度とエルシアさまとはベッドをともになさいませんでした。その頃には王妃はふたりの王子を出産なさっていましたし、彼はもう自分は王として王妃に対しては十分その職務を果たしたと考えていたのでした。けれどもエルシアさまにしてみれば、邪魔な妾も死んだことだし、うまく宰相のリュミエールに働きかけて、王の寝室の記録係も追い払い、さあこれから思っていた時でした。それなのに王にそのような冷たい仕打ちを受けてひどく傷ついたエルシアさまは、結局愛人をつくることで自分の心の寂しさを紛らわすしかなかったのです。

王は晩年、自分の生涯を振り返って一冊の本をしたためましたが、そこにはラプンツェラとルネというふたりの女性についての赤裸々なく真実が告白されています。彼の生涯において本当に愛したといえるのはこのふたりの唾の女性だけだったということも。王はこの本の中で自分の奥方であるエルシアさまのことをあまりよく書いていらっしやいませんが、本当の女心というものを知るのは、たとえ王さまといえども難しかったということなのでしょう。

エドガーさまはラプンツェラがあの石の塔から身を投げた時、誰のことをも恨みはしませんでした。自分がリュミエールの立場であったとすれば、やはり彼と同じことをしたかもしれないし、母上のセシリアさまのことも、気の毒だと感じただけでした。何よりラプンツェラ自身がそんなことを望みはしないだろうと思いましたが、エドガーさまは彼女の遺言どおり立派な王さまになることを志して、実際宰相のリュミエールとともによい政治を行った善王として歴史にその名を留めています。でもそうしたことは別に王の心は

ラプンツェラがあ石の塔から身を投げたその瞬間に、同じようにある部分石化してしまったのでした。そしてエドガーさまの魂もまた石造りの塔の住人となり、そこに囚われたまま生涯を終えられたのかもしれない。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8242e/>

ラプンツェラ・ラッシェラ

2009年10月20日06時23分発行